

第672回

九州朝日放送番組審議会議事録

—— 2025年4月度 ——

◇ 議題

<ラジオ番組>

「BBIQ BBIQ はやいんかい presents パオーンがサンパレス！
～終わったよ、誰だかわかったかな？～」

放送日：3月23日(日)正午～午後1時00分

◇ その他

2025年4月21日(月)開催

九州朝日放送株式会社

第672回 番組審議会議事録

1. 開催年月日 2025年4月21日(月) 15時25分～16時35分

2. 開催場所 九州朝日放送 本社7階A会議室

3. 委員の出席

委員総数 8名

出席委員数 7名

委員長	上野	恵梨奈
副委員長	山根	久資
委員	副田	智幸
委員	小柳	美佳
委員	森	慎二
委員	泗水	康信
委員	林田	真心子

欠席委員数 1名

委員	サーズ	恵美子
----	-----	-----

放送事業者側出席者名

代表取締役社長	森	君夫
取締役 報道制作局長	大迫	順平
執行役員 総合編成局長	柴田	高宏
総合編成局編成戦略部 部長代理	岡本	郡治
KBC M○○○V PAO～N 番組プロデューサー	乙部	奈瑠美
番組審議会事務局長兼広報室長	吉岡	実
番組審議会事務局(広報室)	松永	俊郎

4. 議題

- (1) ラジオ番組「BBIQ BBIQ はやいんかい presents パオーンがサンパレス！
～終わったよ、誰だかわかったかな？～」

放送日時：3月23日(日)正午～午後1時00分

- (2) 4月・5月 ラジオ・テレビ番組編成状況の報告
(3) 3月 視聴者・聴取者応答状況の報告
(4) その他

5. 議事の概要

委員の意見（概要）

委員からは、

- テンポのいいトークと会場の拍手や笑い声により、楽しいイベントの雰囲気が伝わった。リアルイベントならではの盛り上がりや際どいかけ合いも楽しかった。
- 出演者が楽しみながらイベントを進めている様子が伝わった。イベントであってもラジオならではの距離感が伝わった。伝統的なメディアの魅力を再確認することができた。
- 「PAO～N」が長年愛されていることや沢田幸二エグゼクティブアナウンサーの人気の高さを知ることができた。往年の番組ファンにはかけがえのない機会だったと思う。
- トークショーや漫才、物まねなど、普段と違うパーソナリティーの一面を見ることができた。（イベントだけでなく）ラジオ番組を聞いたリスナーも楽しめる企画だったと思う。
- 「さわだや」の漫才は笑いがとまらなかった。沢田アナウンサーと和田安生さんの息のあったかけあいはもちろん、福岡ならではの話題により共感を誘われた。
- 会場と番組のリスナーにも一体感のようなものが共有されていた。普段のリスナー以外も楽しめる内容になっており、新規リスナーの獲得に向けた良い取り組みだったと思う。
- ステージ裏の出演者直撃インタビューは会場の熱気が目に浮かんだ。お茶らけた演出も、実はすごく真摯に取り組んでいることや周到に準備されていることが伝わった。
- 番組はイベントに行った人も行っていない人も楽しめるように工夫されていた。とてもきれいな音声で収録されていた点も良かった。

などの評価を頂きました。

一方、気になる点や望むこととして、

- 普段から「PAO～N」を聞いているリスナー以外は置き去りにされているように感じた。初めて聞いたリスナーには少し掴みづらい内容だったのではないかと。
- 番組のタイトルが何を意味しているのか分からなかった。
- 下ネタや旬の話題を交えたトークに不快感を抱く人もいたのではないかと。特に、子どもは耳にした言葉をすぐに口にするので、ラジオが及ぼす影響を想像し配慮してほしい。
- 公共の電波を使った「番組」で下品な言葉を連呼するのはいかがなものか。ライトリスナーの取り込みも目的だったのなら、むしろ遠ざかってしまう印象を受けた。

- 物まねは視覚的に楽しむ部分も多かったのではないかと。想像力を掻き立てるのもラジオの魅力ではあるが、音声だけでは分かりづらいと感じる場面もあった。
- 誰が何人出演していたのか分からなかった。全員を認識することができなかった。
- これほどニッチな層をターゲットにした番組に対して、番組審議会で意見を求められても回答に苦慮する。そもそも番審の課題にするべきではないのではないかと思った。
- 今後も定期的にイベントを実施するのか気になった。

などの批評や提言を頂きました。

これらに対して、制作担当者からは、

- 2023年に「大感謝祭」として無料イベントを敢行したところ、全国からリスナーが詰め寄せ入場を打ち切った。その苦い経験のリベンジとして今回のイベントを行った。
- ターゲットは40代から60代の番組リスナー。ただし、会場には親子や高齢者のほか、radikoで番組を聞いているという若い世代の来場も見られた。
- 漫才の台本は週1回番組に出演している和田さんが書き、沢田アナウンサーと一緒に練習をした。番組では上手に伝えられなかったが、赤いネクタイでそろえるなど熱を入れていた。
- タイトルは、スポンサーがCMで使っているフレーズを借用したもの。普段から「PAO～N」を聞いていないというリスナーにはもう少し説明が必要だったかもしれない。
- 新規リスナーの獲得より既存のファンに楽しんでもらうことが主な目的だったので、少し身内のノリが強すぎたのかもしれない。
- イベントに来られなかったリスナーにも当日の雰囲気伝えることに重きを置いたため、放送では会場が盛り上がっているのかなど、一部伝わらなかった場面があったかもしれない。
- 一部下品と受け止められた言葉はあくまでもラジオネーム。人を傷つける内容や人権侵害、放送倫理に違反するものは慎まなければいけないが、ラジオにはリスナーとの親近感や近さで成り立つ部分がある。お行儀よくなりすぎてもつまらないので、バランスを見ながら番組制作に挑んでいる。
- 「PAO～N」は紛れもなくKBCラジオを代表する番組。今回は初の有料イベントだったが、大勢のリスナーに集まってもらった。新しいコンテンツ制作の形として、リスナーにも放送を支えていただく取り組みを番審委員にも知ってほしいという目的があった。
- イベントは普段から番組を支えてくれているリスナーと対面できるいい機会なので、今後も特別感のあるトークイベントなどを実施したい。
- 音声がきれいだったのは技術陣の尽力。会場で使用した映像やカメラ撮影はテレビに携わるスタッフに協力してもらった。イベントの成功はKBCが風通しの良いラテ兼営局だから。
- 出演日が異なる出演者同士はあまり会話の機会もないが、イベントを通じて一体感が生まれた。メディアの衰退が叫ばれるが、番組サイドとリスナーが一緒になる良い機会だったので、今後もラジオの可能性を広げることができるよう頑張りたい。

などの説明をしました。